救済の進軍

小田多井夕画

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
救済の進軍

【Ｎコード】
Ｎ３５５４Ｚ

【作者名】
小田多井夕画

【あらすじ】
召喚術で異世界の生物や物質を召喚して発展した世界。その世界で起こった大戦の最中、大国が発動した極大召喚術が、敵国の介入により暴走、無限に湧き出す魔物により、世界に未曾有の召喚災害が訪れた。人々は都市の城壁の内側にひきこもるような生活を余儀無くされることとなる。そんな中、インティアという都市の領主の娘として生まれた、エリア・メインティアルは前世である地球での記憶と、その更に前の前世である別の異世界の魔王であった頃の一部の力、更には父親から受け継いだ大召喚術でもって、部下たち

とともに世界を救うための進軍を始めるのだった。

序章　始まりの日

エリア・メインティアルは振り向いた。自分がここまでに集めた直属の部下たちへ振り向いた。彼らの存在が、彼女の仮説を肯定し、そして、彼らの働きがエリアを望む位置まで推し進めてくれた。エリアは彼らに向かってうなずき、壇上へ向かって足を踏み出す。その長くまっすぐな白髪をゆらしながら、一段一段踏みしめてあがっていく。そして、壇上に立ったエリアの目に、広場を埋め尽くす人々が飛び込んできた。その中の多くの人々が笑っている。表情に希望の光がともっている。人々の表情の中にエリアへの信頼と信用と支持する意思が見て取れる。エリアはもしかしたらこの後、自分がそれを壊してしまうかも知れないということを考え、しかし、その考えを押さえ込む。そして、自分の目的のため、自己の感情を希望へ向ける。多くの人がついてくるのはより輝かしい希望にだと、エリアは知っていたから、無理やり感情を希望へ向け、演説を始めた。

「領民たちよ！今日は良くぞあつまってくれた！これだけの人々が、私が話すこの都市の未来に興味を持っていてくれることを嬉しくおもう！だがすまない、今回の演説はこの街の未来を話すものではない。今回の演説で、私が諸君らに伝えたいのはこの世界の未来だ！

諸君も知っての通り、大戦中であった６８年前、カーディス国の無限召喚式がレティロカ帝国の術式介入の結果暴走し、未曾有の召喚災害となった！それにより人間は城壁の内の閉じた都市でしか生活できず、じりじりと滅びへ向かって進んでいっている。都市内で確保できる資源はいずれ枯渇するし、人口も減り続けている。私の父であるクロード・メインティアルが領主を務めていたときより、皆にも協力してもらい、都市全体で節制と新資源の発掘に力を注いできた。だからこそ、このインティアは６８年間も耐え続けることができた。資源を備蓄してきていたからこそ、魔物たちの不意の襲撃によって砕かれた城壁を再建することもできた。だが！このまま

同じことを続けていても問題は解決しない！城壁の外では無限召喚により魔物が増え続け、城壁の内では人も資源も減り続ける。仮に召喚がとまったところで外の魔物たちが消えることもない。このままではいずれこの街は滅びてしまう！そして、それは当然この街だけではないだろう！世界全体で生き残っているすべての都市が、同じような現状におかれているはずだ！この世界危機である召喚災害に対処するには、この世界の全人類で挑むしかない！そのために私は他都市へ向けた進軍を開始する！」

響き渡るエリアの声に、彼女の領民たる人々は様々な反応を示した。神妙な顔でうなずくもの、驚きのあまり唖然として立ち尽くすもの、顔を恐怖にゆがめるもの、大きな感情の渦がその広場に渦巻き始めようとする。だが、エリアはその前に、感情が爆発する前に、更なる言葉をつむいだ。

「私が領主の座についてから17年！この進軍のために多くのことを準備してきた！軍備の強化はもちろん、農業改革や魔物の肉の食用化加工の効率化といった食料問題の改善、火薬の研究と銃の発明による、非召喚術者への対魔物戦闘能力の付与、召喚術式研究による召喚術の効率上昇。それらはすべて、私がこれからの進軍のためにすすめてきたものであり、諸君らもよく知る、私の出してきた成果だ！これだけの成果をだし、この街は今のままでも、かなり長く耐えることできるはずなのだから、わざわざリスクを侵して遠征する必要はないのではないか、というものがいるかもしれない。だが、この進軍は今しかできない！これまでの状況では、進軍を始めるには力が足りなさ過ぎたし、これ以降ではこの街の力はじりじりと衰えていくだろう！進軍するにはいましかないのだ！

諸君は認めていてくれるはずだ！たった5歳で領主を継いだ私が、多くの悪意に屈さず、常に成果を挙げ続けてきたと！その信頼をもう少しの間でいい、私に向けていてくれ！私はこの世界を必ず救い出す！未来を生きるものたちへ希望の芽を残すために！未来を生きるものたちへ絶望の種を残さないために！私は兵たちとともに命を

賭して世界を救い出すと誓う！だから頼む！諸君の希望を、諸君の未来を、諸君の命を……私に託してくれ！」
強く語ったエリアは、額に汗を浮かべていた。細く、ラインの美しい肩が、軽く上下している。
紡ぎだされたエリアの言葉、その言葉を領民はすぐには受け入れられないだろう。それでもエリアの言ったように、このままでは世界は滅びる。進軍のタイミングは今しかない。だからこそ、民に受け入れさせなければならない。ゆっくりと死に行くのではなく、成功率の低い手術を受けるような選択を。だからこそのエリアの演説だった。演説によって領民の心は揺れている。その状況であるからこそ使える強硬手段が、エリアにはあった。
『魔眼』
遥か昔、エリアの魂の器が持っていた「他者を支配する魔眼」その名残。いまやかつてのような力を持たぬエリアの体では、この広場の者達のうちの一部を催眠術にかけるのがやっとだ。しかし、直接一対一で見たものならば、ある程度なら操ることが可能だった。
「……そうだ、このままじゃこの世界はジリ貧だ！領主様の言うとおりだぜ！みんな、ここで死ぬのを待つよりは、希望に向かって進軍しようじゃないか！」
「おお！そうだ、俺たちは魔物にやられるだけじゃねぇ！今なら俺だって銃を持ってたたかえる！進軍だ！他の都市のやつらも助けて、世界も救ってやろうじゃねぇか！」
広場の中心あたりで上がった言葉に呼応するかのように、広場のあちこちで声が上がる。その声は心の揺れた領民たちにすぐに伝染し、数十人、数百人、数千人と広がっていく。
――――ごめんなさい。
エリアは心の中で謝る。
最初に声をあげたものたちは、演説より以前にエリアが魔眼で支配下に置き、この広い広場の要所に配置したものたちだった。エリアは彼らが思っていないようなことを強制的に言わせたことに、罪

悪感を感じる。
――――私に罪悪感を感じる権利なんてないのにね……
広場に集まったものたちの大勢は決した。彼らの意思は、この街の１２万人の人々の多くに伝播するだろう。これで、ようやくエリアは一歩を踏み出す準備が整った。
「おつかれさまです、エリア。魔眼の効力維持と演説でお疲れでしょう。あとは私が……」
後ろを振り向くと、自分の最古参の直属部下であるリグリア・エーディスが壇上へ上がってきていた。彼が、進軍に向けた詳細日程や細部の情報を、領民へ伝える役割となっている。
「ごめんなさいね、あなたに大変なお仕事を押し付けて」
「元魔王ともあろうお方に心配していただき光栄です。大丈夫ですよ、ここはまだスタート地点ですからね」
「元魔王といっても、魔王の後に一度ただの人間はさんでるんだけどなぁ……」
その日が始まりだった。
エリア・メインティアルと八人の直属部下を中心とした、世界救済のための進軍、その始まりの日だった。

一章　序　エリア・メインティアル（前書き）

設定説明です。面倒だと思う人は次の話から読み始めてもいいと思います。中二病とノリとテンションに任せて書いて、推敲もしていないため、非常に読みづらいと思いますが、ご容赦ください。

一章　序　エリア・メインティアル

エリア・メインティアルが、正確に言えばその魂が生まれて最初に思ったことは、

――――今回の転生はおかしい。

だった。

何せ、エリア・メインティアルの体に宿る前、地球の日本人として一生を終えるとき、彼女の魂はもう転生しなくてもよいと思っていたのだ。

日本人女性であった彼女の人生は、生まれついての病気のせいで、短いものだった。しかし、学びたいことを学ぶことができ、親しいものたちと笑いあってすごすことができた。そんな充実した人生だったから、彼女はもう転生を望んではいなかった。

しかし、彼女は転生した。正確に言えば転生させられた。それは何らかの強制的な力によって魂が呼び出され、それがこの世界の体に定着したというような感覚。

彼女はこの世界に転生するまでに、すでに二回の転生を経験している。一度は魔法を使える猫から、人間への恨みによって魔王の娘の器に転生したとき。二度目は、相思相愛であった勇者の剣に貫かれて死んだ後、生まれつき不治の病を患った人間に転生したときだ。

どちらの場合も、魂のもつ強い意志と、神との契約によって転生していた。一度目のときは、人間のことを理解するため、異世界の魔王となり、二度目のときは、人間に復讐するために、人間に転生した。どちらのときも、人間への復讐心や、勇者とともに生きることのできなかった無念感、そういった強すぎる感情が神まで届き、そうして現れた神との対話と契約で転生させてもらったのだ。

それが今回はまったくなかった。神が言うには転生しない魂は、記録を浄化されて、ほぼ白紙の状態で別の何かに宿るらしい。だが、今回彼女が転生したのは魂の浄化の前だ。死して唐突に働いた強制

力が、彼女をこの世界へと飛ばしたのだった。
彼女は生まれてすぐの頃は疑問に思っていたが、エリア・メインティアルとしてこの世界の常識を知ってから、とある仮説にいたる。それは――――

『この世界で今暴走している無限召喚式が、異世界の死者の魂もごくまれに召喚してしまっているのではないか？』

――――というものだった。
そして、エリアが6歳のとき、その仮説を証明するものと出会うことになる。

エリアの父であるクロードは、エリアが四歳の頃に、大規模召喚の反動によって死亡した。この大規模召喚はメインティアルの家系に古くから継承されるもので、大量の呪力を使って龍を召喚する術式だ。この術式は元来、長い時間をかけて準備し、発動するものであるが、クロードは魔物たちの不意の大規模襲来を迎撃するために発動したため、その生命力の大部分を失うこととなったのだ。そして、その一ヵ月後、エリアへの術式継承を済ませた直後にクロードは死去し、更に半年後には、まだ5歳であったエリアが領主につくことになった。
しかし、5歳の子供が領主である以上、多くのものたちがエリアを侮り、自分の思うまま利用しようと画策することは、もはや自明の理であった。そのため、エリアが領主になって最初の1年は、部下たちの人柄を見極めたり、信用を置ける部下を探すことに当てることだけに費やすことになった。力の弱い器ではあるが、エリアは元魔王である。当然、統治するということがどういうことか熟知している。それでも、たった一年で部下の構成や人柄を把握し、信用を置ける部下を最低限確保したのは、すさまじい早さだといえるだろう。だが、エリアにとってスムーズな人員掌握よりずっと大きか

ったのは、リグリア・エーディスとの出会いだった。
彼こそが、エリアの仮説の証明である。
つまり、リグリアも転生者だったのだ。
リグリアはエリアが領主となってから最初の新職員だった。リグリアの高い能力に目をつけたエリアが面接をしたとき、なんと彼はこの世界では発展していない『魔法』を使って見せたのだ。エリアは自分の魔法や魔眼をリグリアに見せ、自分の前世と彼の前世の話をし、その後即座に彼を直属の部下に添えた。

それが、エリアの計画の始まり。

エリアは前世である地球の知識の中で、現状のこの都市でいかせそうなものを、作り出していった。
それと同時に他の転生者を探し、直属の部下を増やした。
直属の部下となったものの中には、地球にも、エリアが魔王だった頃の世界にも、猫だった頃の世界にもない力を扱うものもおり、エリアの計画の進行を更に推し進めることとなった。

そうして、たった17年で、エリアは自分の計画をスタートラインまで推し進めたのだった。

一章　一　領主の力（前書き）

本編開始です。つたないですがご容赦ください。

一章　一　領主の力

「諸君、ようやくこの日が……進軍の日が来た！」

始まりの日より三ヶ月たった今日、エリアは再び壇上に立っていた。

あの演説の直後より集まった、すさまじい数の志願兵を、エリアは急ピッチで部隊に組み込んだ。可能な限り直接戦闘を避けられる職種の部隊を中心に、新規兵を組み込み、全部隊を再編成するのに三ヶ月間時間を使い続けた。

さらに、部隊編成や様々な進軍の準備と並行して、大規模召喚術の準備が三ヶ月かけて行われた。改良に改良を重ねたこの術式による、エリアの大規模召喚が、今回の進軍の狼煙となる。

「今ここに集まった兵士諸君の中には、三ヶ月前まで召喚術はおろか、銃にも触れたことなかったものが多数いるだろう。それでも、私の意思に賛同して、志願してくれて……ありがとう。諸君はようやく、部隊の規律や銃の使い方の初歩を、学んだところかもしれないし、最終募集で入隊した者たちはいまだにそれもままならない状態かもしれない。しかし、君たちが志願してくれたことこそが、何よりの力となる。

この前まで守るべき市民でしかなかったものが、自分たちと同じ位置に立って、世界のために戦おうとしてくれている。大きなリスクを背負うものだと理解して、それでも私の考えに賛同してくれている。前者は多くの兵たちの、後者は私や、私と意見を同じくする私の部下たちの、大きな心の支えだ！それは、これから訪れる多くの苦難において、多くの者たちを救うだろう！」

現在のインティア軍の総勢は3万4千。三ヶ月前までは2万だった軍が、1．5倍近い数となっている。

このうち、新規兵7千と熟練兵3千の計1万人の部隊で、主力部隊進軍中のインティアの警護を行い、残りの主力部隊で、進軍を行

う。
進軍先は、サグリスと呼ばれる都市だ。サグリスは無限召喚暴走時の記録にある、避難民を受け入れた大都市の中で、インティアから最も近い場所に位置していた。
今回の進軍の状況を考えると、順調に進めば、５日で着く位置である。
「これより私たちは、城壁の庇護より離れる。常に命の危険を身近に感じる進軍だ。だが、諸君の意思はその程度のことで屈するものではないと信じている。諸君の意思と力を、城壁の外を我が物顔で闊歩する魔物どもに、知らしめて欲しい。
だがまず最初に、私が諸君に示そう！私たちがこれより進む道を！私の意思と力が、諸君の信頼に足るものであることを！
今から示すものが、私が世界を覆う災厄に反抗する力だ！」
そういって、エリアは手を天に向かって掲げ、叫んだ。
「メインティアル家１７代目当主、エリア・メインティアルが乞う！我はここに血の契約に基づく、力の顕現を欲す！軍神龍・エグラディアよ、今こそその力をここに示したまえ！」
エリアの長い白髪が、ゆらゆらと彼女の背後でゆれ始める。この三ヶ月間を使って都市に大きく描かれた図形が、青白い光を帯びる。この都市にいるすべての召喚術者と、呪力への感受性が鋭敏なものは、その圧倒的な呪力と、緻密にあまれた召喚術式に目を奪われる。
青白い光が更に強さを増し、それとともに空が暗転し始めた。強大な術式が今にも発動しようとしている前兆だ。
エリアの瞳の色が、黒から紫に変化した。そして、掲げていた手を一気に振り下ろす。
瞬間、召喚術者の目には、力が爆発したかのように映った。
普通のものの目には、天に魔方陣が転写され、その中間に穴が開いたかのように移った。
そして、その中空に開かれた穴から、巨大な赤紫色の龍が姿を現す。

空気がたわむ気配と、空間が破砕するすさまじい音。それが領主の召喚術だとわかっていながらも、領民たちは恐怖した。圧倒的な力の前に、理屈も理性も一瞬にして屈してしまったのだ。

「なるほど、これだけの召喚術の力をただ一撃に注ぎ込んだか。確かに、そうでもしなければ不可能な注文よ……よかろう、力を貸してやる」

領民すべての頭に声が響く。その声から感じる力から、誰もが一瞬で、龍の発した言葉だと理解した。

「さすがは我が守護神、我が意図を理解していただき、幸いです」

エリアは龍に敬意を払ってはいるが、術式そのものは龍の行動をすべて確定させていた。今回の召喚において、この龍が自由にできるのは言葉を発することのみだ。だが、それでも龍が式に抵抗するのと、協力的なのでは、消費する呪力も、これから行う攻撃の成功率も、格段に違う。

全長１００メートルを超える龍が、空中で身を翻す。それだけで、すさまじい呪力が空間を奔った。

龍の向いた方角は、ちょうどサグリスのある方向だ。そちらに向かって開いた龍の口に、膨大な呪力が集まり、そこで何度も力の質が変革する。

そして、その力は轟音とともに解き放たれた。龍の放った力は、凹レンズのような術式いくつかをくぐって、巨大な光の柱となり、龍の口の動きに合わせて、インティアの城門前から、サグリスまでを一閃する。最大まで拡大された、その力の円柱の直径、実に２００メートル。その分、力の密度は落ちているが、術式にこめられた効力は正確に働いたことが、エリアの第二の魔眼には見て取れた。

エリアがこの三ヶ月かけて作り出した、今回の召喚術式にこめられた、龍への行動指定は、『進軍の障害となるものだけを対象指定した広範囲攻撃』だ。これをもって、長い間人の手から離れていた、城壁の外の世界に、進軍の経路を作ることが目的だった。かなりシビアな対象指定攻撃で、なおかつ広範囲攻撃である。当然、すさま

じい量の呪力が必要となるため、龍の召喚可能時間は攻撃一回に絞らないといけない。失敗すれば、進軍はかなり困難なものになるところであったが、幸いにもこの攻撃は成功に終わった。

「貴様の注文は果たした。貴様の望むとおりの道をつけることができたはずだ。

では、代償として、貴様がこの先二ヶ月で蓄えるはずの呪力をもらっていく」

龍がそういうと、エリアの全身から呪力が抜け落ちるとともに、龍が現れたときの穴へと帰っていった。彼の龍とメインティアル家の契約は、ギブ&テイクである。メインティアル家は力を借りた後、その後自分が蓄えるであろう呪力を渡すのが契約内容だ。

これによって、エリアはこの先二ヶ月間、召喚術と、直属部下から学んだ呪力を使う力、『天呪』を使うことができなくなった。召喚が使えないということは、エリアにとって今の器での最大の切り札が使えないということになる。

「私は今、諸君に力と道を示した。次は諸君が示す番だ。諸君の力を私に見せてくれ」

だが、エリアはまったくそれを気にした風もなく、自身の領民へ向けて言葉を発した。

いまだに、先ほどの召喚の衝撃から抜けられない領民は、一瞬反応が遅れた。しかし、すぐにあちこちで雄たけびが上がる。すぐに広がったそれは、怒号となって広場を振るわせた。

それを満足げに見下ろしたエリアが、腕を横薙ぎに払い、告げる。

「これより、進軍を開始する」

一章　二　進軍開始（前書き）

設定の話が結構多いかもしれません。

一章　二　進軍開始

インティア軍の移動間の配置は、物資の運搬部隊や、伝達要員などの、新規兵を中心に構成された補助部隊と、エリアや直属部下、直属部隊のいる司令部をあわせた５千人が中央。その両側を戦闘員や召喚術者を中心に編成された７千５百ずつ、合計１万５千の部隊が挟み込むように配置されている。

前と後ろは両脇の戦闘部隊が突出しており、正面や後方からの魔物の襲撃などに対しては、その両脇の部隊が内側へ折り込まれるようにして、非戦闘部隊と魔物の接触を避けることができるようになっている。

合計二万の部隊の中に、召喚術者は約４０００人。両側の戦闘部隊にそれぞれ約２０００人ずつと、ごく少数の精鋭が、直属部隊に配置されていた。

インティア軍の主力武装である銃は、エリアの作った設計図に基づいて作られている。この銃は技術的な段階を数段飛ばして、地球の一世代前の小銃程度の性能をすでに持っており、正面からの戦闘ならば、一般兵が召喚術者を上回ることができるほどの状態だ。

しかし、魔物の持つ耐久性は、一般生物のそれを数段上回るため、この銃の圧倒的な威力をもってしても、一撃でしとめることは、よほど上手く急所に当てることができない限りは不可能である。そのため、対魔物戦闘が中心となる今回は、召喚までの時間稼ぎと、召喚後の援護射撃が射手の役割となる。

「それにしても、弾薬の大量生産が可能になるのはいつになることやら……」

そういったのは、エグスト・クリエスタだ。エグストはエリアが四番目に見つけた転生者で、前世の世界は、１９７０年代程度の科学技術と、それなりに高度な魔法技術を持つ世界だったらしい。金髪碧眼の美青年だが、お調子者で、いつもへらへらしている。しか

し、戦闘能力が高く、戦闘中は非常に頼りになる男だった。
「まずは資源の確保と工場の設置が必要だから、なかなか難しいわ。もうしばらくごまかすしかないわね」
エグストの言葉に答えたのはエリアだ。
インティアは幸運なことに、地下に鉄の鉱脈があり、鉄の資源は豊富だった。そのため、銃そのものの生産工場は十年程度で形にできたが、弾薬はそうはいかなかった。
火薬の原料が確保できなかったのだ。
そのため、現在弾薬に使用している火薬は、エリアと直属部下たちで作った魔法術式によって生成されている。
現在使われている火薬は、ニトログリセリンとニトロセルロース。セルロースとグリセリンは通常手段で確保し、ニトロ化を魔法によって行っている。空気中の窒素と酸素を、魔法の力で無理やりニトロ基の形で化合させて、安定させるのだ。
当然、軍全体の弾薬に必要な量を生成するために必要な魔力は、今のエリアたちの保有魔力量ではまったく足りない。
しかし、この世界では魔法が発達していないというだけで、この世界の住人も潜在的に魔力を保有している。そのため、エリアと部下たちは、都市全体の人間からほんの少しずつ魔力を吸収する術式を張り巡らし、それによって足りない分の魔力を補っていた。
だが、いくら少量ずつといえど、魔力は生命力とかなり深い関係にある。そのため、連日発動させることは当然不可能だし、頻度が少なくとも、市民の生活に影響を与える可能性がある。
そのため、以前から弾薬の生産を、魔法に頼らない方法で実現することが、エリアたちの目標の一つとなっていた。
「天呪でも似たようなことができればいいのだけどね」
エリアが今言った天呪というのは、エリアの直属部下の一人、ミリア・レスティンの出身世界の技術だ。この技術は、呪力を使って、割と大雑把な事象を起こすことができるというものだ。大雑把である代わりに、戦闘時の攻撃力変換効率がよく、なおかつこの世界の

召喚術の消費エネルギーと同種の呪力を使うため、エネルギー保有量が多いものもいるため、非常に有用な技術だ。しかし、大雑把であるため、魔法より応用の幅は狭く、物質のニトロ化など、夢のまた夢といったところだ。

ちなみに、呪力と魔力はまったく別のエネルギーである。更に言えば、エリアの直属部下の使う能力には、更に別種の力を使うものもある。最初はエリアも驚いたが、それ以降は自分の知らないエネルギーも存在することを前提に動くことにしていた。

「日中は順調に行けそうですね、エリア」

後ろから歩いてきた、黒髪長髪の三十代ほどの男が、エリアに声をかけた。リグリアだ。

直属部下であるリグリアが歩いているのは、インティアには騎乗用の動物が存在しないからだ。４７年前の大規模襲撃の際に、多くの人間と家畜や騎馬などの動物が犠牲に成った。そのとき、家畜は一部が生き残り、それより再度繁殖で増やすことができたらしいが、騎乗用の動物はほぼすべて全滅してしまったらしい。そのため、エリアだけは直属部隊の召喚術者が召喚した魔物に乗っているが、他は全員が徒歩での移動となっている。

「そうねリグリア、アスティたちから何か連絡は？」

アスティというのは、直属部下のアスティ・リストのことだ。アスティともう一人、直属部下であるエンディ・モリンドの二人は、インティアに残って、普段エリアが行っていた公務の代理と、都市防衛軍の最高指令をしている。インティアのほうで何かが起こった場合は、エリアの作った魔法具で連絡することになっていた。

「特に何もありません。二人ともあまり魔法が得意じゃありませんからね、よほどじゃないと魔法具を使用することはないでしょう」

アスティの前世の世界の特徴は、全体での特筆すべき技術などはなかったが、悪魔契約者が１００人に１人ぐらいの割合でいたらしい。アスティは悪魔との契約で、片足と片目を供物に、千里眼を手に入れたそうだ。その契約は魂に刻まれたものであるため、今でも

アスティは左足と右目がない代わりに、千里眼を持っている。
　エンディのほうは、前世で武術と剣技を極めており、特殊な力としては、身体強化のみであるが、変換効率のすさまじく高い、闘気という力を使う。前世の世界にも魔法はあったらしいが、武術と剣技、闘気のコントロールを磨くため、魔法に手を出す余裕などなかったらしい。
　そのように、二人とも前世で魔法を使った経験がないため、魔法の使用は苦手としていた。
　エリアとしては、完全に主観的な意見でしかないが、二人とも前世ではまったく女らしくない生き方をしていたんだなと思う。
「そうね……それはそうと、全部隊、三十分後に停止、すぐに野営の準備をするという伝達をお願い」
「了解しました」
　伝達はいくつかの方法で行われるが、今回使われるのは信号弾の発射だ。新規兵を中心に構成される伝達部隊が、全部隊を示す黄色、十分を示す青を三発同時、停止を示す紫、野営準備を表す白の信号弾を順番に空へ向けて放った。一度に全軍に支持を出すことができるのが、この伝達方法の強みだ。
　日はもう傾きかけている。新規兵が多いことも考えると、この日の進軍は後三十分がぎりぎりだろう。そうでなければ、野営の準備完了が日が落ちた後になってしまう。そうなることは絶対に避けなければならなかった。
「これからが、最初の難関ですね」
　エグストの言うとおりだった。
　現在の軍の布陣は縦長で、両側の部隊の端の列から、龍の一撃で作られた街道の端まで、それぞれ５０ｍずつある。５０ｍ障害物のない地帯が続くため、とても襲撃を察知しやすいといえるが、それでも夜には見通しは悪くなるし、活動する魔物も増える。
　昼間は龍の一撃の直後ということもあり、警戒して襲撃してこなかった魔物たちが、この夜に一気に襲撃をかけてくる可能性があっ

た。
「ええ、今日どの程度上手くしのげるかで、今回の進軍の状況が変わってくるわね」
エリアは、鋭いまなざしで、街道の先を見つめていた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3554z/

救済の進軍

2011年12月15日01時53分発行